Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	鈴木, 正崇(Suzuki, Masataka)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2018
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.23 (2018. 7) ,p.132- 133
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20180707-0132

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

鈴木 正崇

最初に大部な拙著を丁寧に読み解いた書評を書いて頂いた藤野陽平さんに御礼申し上げます。本書の中から論旨の大筋と問題の所在、今後の課題を明らかにして頂いた。深く感謝したい。地域研究は土地勘のある所か否かで理解度が大きく変わる。台湾研究が専門の藤野さんにとっては、本書は決して読みやすくはなかったと思う。今回の書評は地域研究を開かれた一般的な議論に繋げるといふ永遠の課題の重みを再確認させてくれた。

本書に関しては時代背景の理解が重要である。中国に関する文化人類学の調査研究は現在では容易になったものの、1980年代から90年代には困難を極めた。中国は1949年の社会主義政権成立以後、長期に亘って政治が不安定で、特に1958年の大躍進、1966年から1976年に至る文化大革命は中国の社会・文化・経済を大きく破壊した。1978年に改革開放が始まり、市場経済化を開始したが、前代の負の遺産は残り続けた。私が初めて中国大陸に渡った1981年の海南島のミャオ族と、雲南のタイ族やイ族の村の訪問時には、まだ人民公社が存在し、生産大隊や生産小隊が機能していた。1983年の貴州省の調査以降、村落に入れる状況が生まれ、少数民族の本格的な調査を開始して、その成果は30年ほどかけて書いた『ミャオ族の歴史の歴史と文化の動態——中国南部山地民の想像力の変容』（風響社、2012年）に結実し、民族文化の特徴とその変化、地域社会と政治権力の関係を明らかにした。

ミャオ族調査と並行して、比較の観点からトン族、ヤオ族、スイ族、トゥチャ族、後には中国南部の漢族などの調査を進めた。その成果が本書で、貴州省や広西壮族自治区の少数民族に関する調査と漢族との関係に焦点をあてた。章ごとに完結したオムニバス形式の連作で、各章は独立した内容になっている。今回の書評で藤野さんが的確に指摘したように、本書には最後に結論めいたものはない。序文に書いたように、本書は諸民族の相互変容の複雑な関係性を主題とし、安易な一般化よりも歴史的变化を踏まえた「過程」そのものに焦点を当て、文献史料も多く併用して歴史的考察を取り込んだ。しかし、本書の基礎となった主たるフィールドワークを行った1980年代後半から2000年代は、行政の監視や規制も厳しく十分な調査を出来たとは言いがたい。また、「同時進行形」の急激な変化につきあい、常に「流動性」を帯びた実態をみてきた経験から言えば、結論は出しにくいというのが正直な実感であった。ただし、この未曾有の大変化の過程を、「想像力の変容」を軸にある程度は描き出せるのではないかと考えた。あくまでも起点は中国の少数民族に置き、漢族との交渉、中国から日本への展開を視野に入れた。そうした試行錯誤が本書となったのである。成功か失敗かはわからないが、電気や水道も

なく道路も未整備の時代から、インターネットが普及し、高速道路・高速鉄道が貫通するに至った現地社会の恐るべき変化を、外部者の視点で考察すること自体に大きな意義があったかと思う。

本書は前作のミャオ族のモノグラフと同様に、文化人類学の流行の潮流と関わりつつも、それを横目で見ながら、地域に根差した民族誌はどうあるべきかを問い続けたことへの回答であった。機能主義や構造主義、解釈主義、ポストコロニアル批判、表象の危機なども意識はしているが、出来るだけ現地に寄り添うことを第一とした。幸運にも現地での協力者には恵まれた。地域研究や民族誌は常に現地の人々との共作であることを忘れてはならない。異文化理解は容易なことではない。言語・風俗・習慣の壁は厚い。長期であれ短期であれ、現地語特有の語法や行動の文脈を重視し、相互の対話の端々から沸き起こる違和感などを窓口にして人間理解に迫るという素朴な方法を採らざるを得ない。早急に結論を出さず、蒐集した資料を寝かし発酵するまで待つ。恐らく最近の科研費による調査では全く認められない手法が基本である。「厚い記述」には至らなかったが、細かなディテールにこだわり網の目のように複雑に入り組む現地での出来事や行動を書き留めておくと、想いもかけないような繋がりを後で発見することになる。それが人類学の醍醐味ではないだろうか。

実は中国の少数民族の調査は、他の地域の調査研究と並行して進めてきた。スリランカ、インド、バリ、そして日本である。現在の文化人類学では決して許容されない手法と言える。しかしながら、文化の異なる複数の地域をそれぞれ往復運動で継続的に動き巡ることで、発想法は豊かになった。大学の制度や学界の常識を超えての非学問的な営みの根源は、1971年のユーラシア放浪にあり、ヒッピーとして歩いた体験がいつまでも残り続けている。

私の代表作は書かれていないという想いが常にある。本書の後書きで使った「中仕切り」という言葉は森鷗外の『普請中』に出典があるが、鷗外の作品もまた未完であったと思う。私自身の仕事も結果的には「未完成の完成」に終わる可能性が大きいですが、更なる集大成に向けて少しずつ進んで行きたいと考えている。「未完」への挑戦への自覚を生み出す契機となった刺激的な書評を書いて頂いた藤野さんに再度、御礼を申し上げたい。

(すずき まさたか 慶應義塾大学名誉教授)